

キャッチボール・コンテストの目的と意義

丸山 克俊（東京理科大学体育研究室）

文部科学省「学習指導要領」の改正に伴い、小学校中・高学年、中学校3年・高校生の体育授業では中心教材として、また、中学校1・2年生では、球技：ベースボール型＝ソフトボールが必修種目として取り上げられるようになりました。この理由は、わが国のベースボール型スポーツ（硬式野球・軟式野球・ソフトボール・）が、まさに国民スポーツとして支持され定着していることにあります。文部科学省・教科調査官の話によれば、ベースボール型は、わが国の青少年が『通らなければならない道』として位置づけられたものです。

特に、中学校1・2年生でソフトボールが必修種目として取り上げられたということは、わが国の学校体育史・ソフトボール史の中では画期的なことであります。

このようなエポック・ポイントにおいて、学校体育授業におけるソフトボールを活性化し、校内のクラスマッチやスポーツ大会、また、地域の対抗試合等々でもソフトボールが積極的に取り上げられるためには、その原点である“キャッチボール”を普及させることが大切です。年間10時間前後の「ソフトボール授業」のみでは、児童・生徒にソフトボールの醍醐味を味わってもらうことにはむずかしいからです。したがって、手軽にできるキャッチボールを大好きにする、夢中にする環境づくりが大切となります。

そのためには、学校体育授業でのソフトボールが引き金になって、家庭においては、親子キャッチボール、学校や地域社会においては、仲間とのふれあいキャッチボールなどを盛んにし普及させるために、キャッチボールを短時間でできるコンテスト形式で競技化し、いつでも、どこでも、だれでもが手軽に楽しめるものにするのが有効であると考えます。この「キャッチボール・コンテスト」が支持されれば、都道府県大会・全国大会、更には国際親善大会にまで及ぶコンテスト（競技会）として一大ブームを起こすかもしれません。その可能性は大いにあると思います。

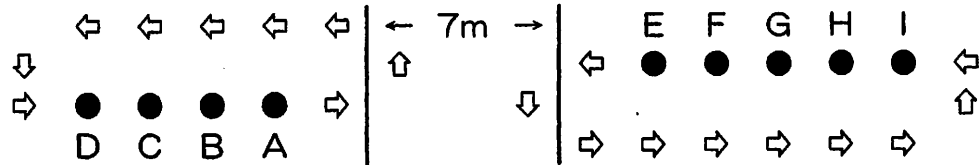
以下に、「キャッチボール・コンテスト実施要項」（一つの案です）を紹介いたします。

* この企画は、財団法人日本ソフトボール協会を初め、ベースボール型の普及活動に取り組む、他の諸団体（例えば、日本プロ野球機構・(社)日本プロ野球選手会など）によって積極的に支持され、ソフトボールの日本リーグやプロ野球の公式戦等のファン（入場券購入者）感謝イベントとして企画・立案されることが望まれます。

キャッチボール・コンテスト実施要項

1. コンテストの進め方

- (1) チーム（1チーム9人編成）は、5～7メートルの間隔で両サイドに引かれたラインの外側に4人対5人に分かれて1列に並ぶ。



- (2) 上図のAがボールを保持し、スタートの合図でキャッチボールを始める。A→E→B→F→C……とボールをリレーする。送球後は、左回り（矢印参照）で自列の後方に素早く移動する。
 なお、送球の後、後方に移動する際には、ボールから目を離さないように（肩越しにボールを見続けて）素早く動くことが望ましい。キャッチボールの技術向上とともに危険防止にもなる。
 [注：投げた後、自列の後方へ移動するのではなく、前方に走って相手側列の後方へ移動する方法もある。この方法では、速やかなランニングが必要となるため、運動量が保証される。]
- (3) 最初のEのキャッチ数を[1]として、以下、全員で声をそろえて、明るく、はっきりと[キャッチボールしたボールの数]を数える。この総キャッチボール数を『キャッチボール・ポイント』として記録する。なお、ボールを地面に落さなければ（ミスしたボールを地面に落ちる前に他の人がキャッチした場合も認める）、キャッチしたものとみなす。
- (4) コンテストの時間は、1分間とする。この時間内に、正確にキャッチできた総キャッチボール数を競う。ただし、競技レベル：グレード1～3を定める。
 なお、コンテストの順位は、原則として、1分間のコンテストを2回続けて実施（間に休憩・練習を入れる）することにより、その合計ポイントによって決定する。
 ①グレード1：キャッチボールミスは、3個まで許される。4個目のミスが出た時点で、そのチームの競技は終了となる。
 ②グレード2：キャッチボールミスは、1個のみ許される。3個目のミスが出た時点で、そのチームの競技は終了となる。
 ③グレード3：キャッチボールミスは、1個も許されない。1個目のミスが出た時点で、そのチームの競技は終了となる。
 *競技終了となったチームは、その場に座って待つ。
- (5) 競技終了後、各チームの主将は、セルフジャッジメント（自己判定）により、総キャッチ数（キャッチボール・ポイント）を審査委員に報告する。虚偽の報告をしたチームはその時点で失格となる。
 *各チームに判定員（審査委員）を置くことも可とする。

2. コンテストの判定方法

- (1) 競技レベル（グレード1～3）によって得た総キャッチボール数（2回競技した合計ポイント）は、そのままキャッチボール・ポイントとなる。
[例：各グレードのルールに基づいて競技し、総キャッチボール数が、1回目52、2回目55の場合には、キャッチボール・ポイント：107（52+55）ポイントとなる。]
- (2) キャッチボール・コンテスト審査委員（1名または複数）は、チーム・キャッチボールの技術的な水準、正確さ、声の出し方（雰囲気）、美しさ等を、各チーム10点満点（0.5点刻み）で採点（ジャッジペーパーに記入）する。
レベルが上になるほどキャッチボール・ポイントの差はほとんどないと言っても過言ではない。したがって、このビューティー・ポイントが加算されることによって、0.5ポイント差によって順位が入れ替わることもある。
また、参加チームが多数の場合には、合計2分間ではきめ細かな審査ができないこともある。その場合には、10点、7点、5点の3ランクに分けて審査する方法もある。運営委員長・審査委員長の合議によってその方法は慎重に検討したい。
- (3) 上記、(1)、(2)の合計 [107+7（ビューティー・ポイント）=114]が、キャッチボール・コンテストの総合ポイントとなる。
[注：ビューティー・ポイントは、決勝ラウンドのみ採用してもよい。予選ラウンドにおいては、キャッチボール・ポイントのみで順位を競う。]
- (4) 運営・審査上の問題点については、運営委員長・審査委員長が、運営委員・審査委員と相談して最終的な判断を下す。
- (5) 学校体育でのソフトボール授業・スポーツ大会で採用する場合には、見学している児童・生徒をまとめて審査員にするなどの方法もある。

3. その他の留意事項

- (1) 各チームには監督1名、主将1名を置く。
- (2) 主将は番号が入ったビブスを着用する。
- (3) 危険防止のため、チーム間は十分な間隔をとる。運営委員の指示に素直に従うこと。
- (4) 競技開始前の全体練習の時間は1分以内とする。2回目の競技に入る前にも1分以内の練習時間を取ることができる。
- (5) 1チームの使用球は1球とする。コンテスト中にミスしたボールは、ミスした選手が周り（観衆を含む）の人たちに手助けされることなく、自チームの責任で拾い、ライン後方の捕球地点まで戻ってから送球しなければならない。

- (6) 原則として、両サイドのラインの外側（片足はライン内に入ってもよい）でキャッチボールをしなければならない。両足が内側に入ってキャッチ&スローすることがあってもよいが、その頻度が多すぎる場合には、審査委員は、ビューティー・ポイントを減点する。
- (7) 審査委員によるビューティー・ポイントの判定は、競技時間の都合上、行わないこともある。また、運営委員長の判断により、前述の「判定方法」とは別の方法によって行うこともある。
[例えば、学校体育でのソフトボール授業・スポーツ大会で採用する場合には、参観している児童・生徒に、ビューティー・ポイントが最も高いチームを挙手させて、その人数をビューティー・ポイントとして判定する方法もある。]
- (8) 終了の合図で速やかに競技を終了しなくてはならない。チーム全体の行動のメリハリも審査対象となる。

キャッチボール・コンテストに基づく表彰

1. チーム対抗戦としてのキャッチボール・コンテストにおいて、優勝・準優勝・第3位などのチーム表彰とは別に、
 - (1) キャッチボールコンテストにおいて、1分間キャッチボール2回の合計キャッチボール・ポイントのポイント数によって、参加者全員に『金・銀・銅バッジ』を授与する。
 - ①金バッジ：1分間キャッチボール2回の合計キャッチボール・ポイントが110ポイント以上のチームに授与する。
 - ②銀バッジ：1分間キャッチボール2回の合計キャッチボール・ポイントが100ポイント以上のチームに授与する。
 - ③銅バッジ：1分間キャッチボール2回の合計キャッチボール・ポイントが80ポイント以上のチームに授与する。[注：このバッジテストについては、ビューティー・ポイントは考慮しない。]
2. 1対1（例えば親子や友だち）で行うキャッチボール・コンテストにおいても、この表彰システムは採用したい。
[例えば、日本リーグの観戦者、ソフトボールフォーラムや様々な講習会への参加者を対象にして、開始時間を予め告知して参加者を募り、所定のルールに基づいてコンテストを実施し、その場で、金・銀・銅バッジを贈呈することも考えられる。]
3. 金・銀・銅バッジには、JSAの文字の他、しゃれたデザインがほどこされているものが望ましい。また、協賛企業名を入れたバッジも認めるものとする。様々な企業名（日本リーグ参加企業にその特典を与える）が入ったバッジを集めることも、子どもたちにとっては楽しいものである。
4. バッジに代わるものとして、『認定証』を授与することも一案である。